

第三者評価

緒方 三郎

(北陸先端科学技術大学院大学特任准教授)

皆さん、こんにちは。石川県にある北陸先端科学技術大学院大学という長い名前のところから来ました緒方三郎と申します。

私、今は大学の教員をやっておりますけれども、少し前まではシンクタンクの研究員をやっております、この事業については前の学術フロンティア事業の頃からおつき合っております。そして、昨年度ちょっと1回お休みさせていただきまして、1年ほどあいていましたので、今回はその続きのお話を聴くことができるということで、大変楽しみにしてまいりました。本日の報告には、たくさんのテーマがあり、それをくくり評価するということは大変難しい作業ですので、いくつか感想めいたことを述べさせていただきます。

この研究事業では、対人援助学という「学」をつくろうという取り組みをなさっておられるわけです。対人援助学というのは、今回の報告のなかに〈わたしとあなた〉という言葉が出てきましたことに明確に表わされているように、個人が個人に対応するという個別性の高い世界ですね。ところが、私の周りでは、今、「社会」あるいは「社会技術」という言葉が氾濫しておりまして、今度、申請する予定の大きな研究資金も「社会的コミュニケーション」という、やや使いふるされた言葉を掲げています。そういう世界にいるものですから、この研究事業の個人の個別性の高いところに焦点を当てている点に大変関心を持っています。多様で複雑である個人的な課題、それを「社会、社会」とすぐにひとくくりにしてしまわないで、まず個人の個別性を受け入れ、個々に対応して、可能であれば社会化をしていくという点に、対人援助学のポイントがあるのではないかと考えております。個人的な問題を拾いながらじっくり取り組み、社会的な問題として示していくという、学問的姿勢に意義があります。

さらに、この研究事業には、必要ならば制度化をしていくということも含まれており、ここにまた新たな産みの苦しみがある。制度化には対象をひとくくりにするという側面があるからです。しかしながら、もう制度化に取り組みられている先生方が何人もおられまして、大変心強いと思いました。

本日、対人援助学というキーワードでくられた研究の報告を拝聴させていただきまして、対人援助学に取り組みられている研究者の集団や活動家の集団にとって、多様な個人的課題に対する受け口（窓口）があり、課題を整理し、対応する研究者や活動家の組み合わせを検討する機能を備えている仕組みがあると、これからますます成果が上がるのではないかと思います。

本日のシンポジウムには「対人援助学の創生」というタイトルがついていて、学会を興し、学問を構築していくという目標を掲げておられます。研究対象については、対人援助の取り組みに関連して、たくさんの事例が集まってきたので、さまざまな方向性が見えてきます。そして、それぞれの一つ一つの研究トピックの背景にある事例の重さに圧倒されてしまうわけですが、見方を変えると、人を対象とするテーマはみな対人援助学として取り組むことができるという性質があるのではないかと思います。そもそも対人援助学というのは、そういった特徴がある懐の深い学問なのだということを感じました。

そして、方法論ということになると、これは学術フロンティア事業の頃から整理されていることですが、実践との融合を行っていくという側面が強い分野です。そうしますと、学の創生ということを考えるに、一つの活動を行いながら研究を進めまして、その後にある程度成果が得られたら学の体系化を図るということになり、今後はそのために学会の設立に向かっていくという、現在、そのステップにあるのかなと感じました。実は私はこの研究事業の試みが、学の構築に向かうプロセスの中で、どのあたりに位置するかということが多少疑問だったのです。ところが、先ほどサトウ先生から学会を設立するその目的と意義をお話いただきましたので、私の疑問も氷解しております。

また、方法論を提示していく際に、対象論とか組織論とか生存論という言

葉が使われた報告がございましたが、抽象度の高い概念で整理されていて、興味深く感じました。例えば、今日も何回か出てきましたが、必ず三角形が出てきますね。援助、援護、享受といった、この大きなキーワードが対人援助学の特徴である、対人援助学というものを示す言葉になっています。私が関心があるのは、そのキーワードのもうひとつ下の階層で、どういったキーワードがあるのかといったことになります。そのキーワードが援助、援護、享受という大きなキーワードと関係することで、対人援助学の学問を構成しているということが言えると思うんですけども、その一つ下の階層を構成するキーワードに関心があります。

そのキーワードというのは、おそらく本日ご報告いただいた研究活動のすべてに対応するものではないかもしれません。ある研究とある研究、たくさんある研究の中の例えば五つぐらいの研究には、同じキーワードで説明が付きやすいということが出てくると、もう一段、学問のパッケージングに向かいやすい、人に説明する際の手段が増えると感じました。

いずれにしましても、私はこの事業につきましては大変関心があり、長く続けていただきたいという希望があります。実は私が今籍を置いております北陸先端大の知識科学研究科はまだできて10年なんです。英語でナレッジ・サイエンスと呼んでいますが、学問としてまだなかなか体系化ができていません。研究科をつくるときに一橋の経営系の先生と東工大系の先生とで構成されたと聞いております。先ほど「学範」という言葉を使うと、知識科学はまだ学範としてひとり立ちできてない状況なのですね。何しろそういった既存の学問のジャンルがないのですから、論文を投稿する場がないわけです。一方で、大学では隣はマテリアルサイエンス研究科という材料系の研究科で、そちらではインパクト・ファクターの高いジャーナル以外は論文とは呼ばないそうです。インパクト・ファクターだけで語られますと、知識科学はどうしようもない。学問を構築するというのは、それだけで時間がかかる作業ですし、人も育てなければならぬ。今の研究科長は最低20年はかかると言っております。言いかえれば、それは社会やアカデミアに認知され、評価されるということですから、そういうことを考えますと、この対人援

助学の試みは、皆さん非常に熱心に取り組まれ業績を出されていて、社会的にも重要な分野ですので、動きが速くてフィードバックもあるということで、20年もかからないのではないかなと感じております。

つたないコメントでしたけれども、以上で終わらせていただきます。